

第 4 問

【解答】

問 1	借方科目	金額	貸方科目	金額
	材 料	420,000	買 掛 金	420,000

問 2

材 料		仕 掛 品	
買掛金 (420,000)	仕掛品 (350,000)	月初有高 80,000	製 品 (624,000)
	価格差異 (26,000)	材 料 (350,000)	月末有高 (94,000)
	数量差異 (14,000)	加工費 (288,000)	
	月末有高 (30,000)	(718,000)	(718,000)
(420,000)	(420,000)		
買 掛 金		価 格 差 異	
	材 料 (420,000)	材 料 (26,000)	
		数 量 差 異	
		材 料 (14,000)	

【解説】

問 1

原料を掛けて購入した取引の場合は、借方の勘定科目は「材料」、貸方の勘定科目は「買掛金」となり、その金額は、次の計算で求められる。

$$\text{原料購入原価} : 2,800 \text{ m}^2 \times 150 \text{ 円 (実際の購入単価)} = 420,000 \text{ 円}$$

新版日商簿記 2 級工業簿記 テキスト p.34 参照

問 2

シングル・プランでは、費目別の勘定（材料勘定など）の借方に実際原価、貸方に標準原価を記入することにより、費目別の各勘定で原価差異が把握される。したがって、仕掛品勘定はすべて標準原価で記入される。

各勘定の金額を計算する前提として、生産データを原料費と加工費に分けて整理すると、次のようになる。

月初 200 個	完成品 1,200 個
当月投入 1,250 個	
月末 250 個	

月初 100 個 ¹⁾	完成品 1,200 個
当月投入 1,200 個	
月末 100 個 ²⁾	

1) 200 個×0.5 2) 250 個×0.4

①材料勘定の記入

買掛金 : 問 1 で計算した金額

仕掛品 : 1,250 個×280 円 (製品 C1 個当たり標準原料費) =350,000 円

価格差異 : (140 円-150 円) ×2,600 m² = -26,000 円 (借方差異)

数量差異 : $\frac{\{(1,250 \text{ 個} \times 2 \text{ m}^2) - 2,600 \text{ m}^2\}}{\text{標準数量}} \times 140 \text{ 円} = -14,000 \text{ 円}$ (借方差異)

月末有高 : 200 m² × 150 円 = 30,000 円

<参考> 原料費の原価差異を図解すると次のとおりである。

実際単価 150 円

標準単価 140 円

価格差異	
標準原料費	数量差異

標準数量	実際数量
2,500 m ²	2,600 m ²

②仕掛品勘定の記入

材 料 : ①の仕掛品の金額

加 工 費 : 1,200 個×240 円 (製品 C1 個当たり標準加工費) =288,000 円

製 品 : 1,200 個 (完成品の数量) ×520 円 (製品 C1 個当たり標準原価) =624,000 円

月 末 有 高 : 250 個×280 円 + 100 個×240 円 =94,000 円
原料費の月末有高 加工費の月末有高

③買掛金勘定、価格差異勘定および数量差異勘定の記入

材料勘定でそれぞれ算定、記入した金額

新版日商簿記 2 級工業簿記 テキスト p.190~p.202 参照

第 5 問

問 1 総合原価計算表 (単位: 円)

	直接材料費	加工費	合計
月初仕掛品原価	1,019,000	850,000	1,869,000
当月製造費用	6,240,000	9,750,000	15,990,000
合計	7,259,000	10,600,000	17,859,000
差引: 月末仕掛品原価	(1,440,000)	(1,170,000)	(2,610,000)
完成品総合原価	(5,819,000)	(9,430,000)	(15,249,000)

問 2

完成品単位原価 = 円 / 個

当月の売上原価 = 円

【解説】

問 1

① 月末仕掛品原価の計算

生産データを直接材料費と加工費に分けて整理すると、次のとおりである。

直接材料費			加工費		
月初	400 個		月初	200 個 ¹⁾	
		完成	完成	2,300 個	
		仕損	仕損	100 個 ²⁾	
当月	2,600 個		当月	2,500 個	
		月末	月末	300 個 ³⁾	

1) 400 個×0.5 2) 100 個×1.0 3) 600 個×0.5

原価投入額の配分方法は先入先出法であるから、月末仕掛品原価は当月製造費用から計算する。また、正常仕損の発生点が終点であるため、正常仕損費は完成品のみの負担となる。この場合、月末仕掛品原価の計算において、当月投入数量から仕損数量を差し引かない。

これにより、月末仕掛品原価は、次のように計算する。

$$\text{直接材料費の月末仕掛品原価} : \frac{6,240,000\text{円}}{2,600\text{個}} \times 600\text{個} = 1,440,000\text{円}$$

$$\text{加工費の月末仕掛品原価} : \frac{9,750,000\text{円}}{2,500\text{個}} \times 300\text{個} = 1,170,000\text{円}$$

②完成品総合原価の計算

完成品原価 = (月初仕掛品原価 + 当月製造費用) - 月末仕掛品原価

直接材料費の完成品原価 : (1,019,000 円 + 6,240,000 円) - 1,440,000 円 = 5,819,000 円

加工費の完成品原価 : (850,000 円 + 9,750,000 円) - 1,170,000 円 = 9,430,000 円

完成品総合原価 15,249,000 円

新版日商簿記 2 級工業簿記 テキスト p.165~p.169 参照

問 2

①完成品単位原価の計算

$$\begin{aligned} \text{完成品単位原価} &= \text{完成品総合原価} \div \text{完成品数量} \\ &= 15,249,000 \text{円} \div 2,300 \text{個} \\ &= 6,630 \text{円/個} \end{aligned}$$

②当月の売上原価の計算

製品の倉出単価の計算方法が先入先出法であるから、当月販売品 (2,800 個) は、1,200 個が月初製品、残りの 1,600 個が当月完成品分から構成されることになる。

月初製品分の原価 : 7,440,000 円

当月完成品分の原価 : 10,608,000 円 (= 1,600 個 × 6,630 円/個)

当月の売上原価 : 18,048,000 円

新版日商簿記 2 級工業簿記 テキスト p.112 参照

新版日商簿記 2 級工業簿記 テキスト p.165~p.169 参照